



特集 第41回 正義と平和全国集会2021 大阪大会 (2021年11月22日～23日)

巻頭言 正義と平和全国集会大阪大会が終わって

■ 勝谷太治 (日本カトリック正義と平和協議会会長)

昨年11月の全国集会は完全リモートで行われ成功裏に終わりました。世界中どこからでも参加できることや、リアルでは無理な形態、全国の拠点をつないだり、瞬時に分科会を移動できたりなどのリモートのメリットを実感した集まりでもありました。参加者間の直接交流は残念ながら、講師や発表者の表情や息づかいを

感じて話を聞く臨場感はリアルに劣らぬものです。ネットやマスコミを通して「集めて知る」情報と、リモートではあっても当事者の話を直接聞く「出向いて行って知る」情報の質の違いもあらためて感じさせられました。

同様の印象は昨年暮、入管問題をテーマとし

て行われた司教団の社会問題研修会においても感じました。名古屋入国管理局内で亡くなられたウィシュマ・サンダマリさんの遺族の代理人を務める駒井知会弁護士と、日本で生まれ育ったにもかかわらず両親に在留資格がないため同じく在留資格がなく、多くの不自由と困難、そして不安の中にある大学生みゆきさん（仮名）の話を知ることができました。入管問題についてはカトリック新聞にも記事が掲載されていたので、私達も情報と知識はある程度持ち合わせていましたが、実際に当事者の話を聞いて感じたことは「何も知らなかった」という実感です。知識として知っていることと、心で感じ取り、その痛みを共有して「知る」ことは全く違うのです。特にみゆきさんの話を聞いた私達はいたく心を動かされ、このことについて司教団として何かアクションを起こすことを全員一致で決めました。

このことは、私が司祭を目指すきっかけともなった出来事を思い出させます。学生時代バンコクで行われたアジア学生会議に参加した時のことです。当時日本はその横暴な経済活動ゆえ海外、特にアジアの人々の反感を買って、日本製品ボイコット運動やデモが頻繁に行われていました。ニュースなどで反日感情の高まりを知ってはいましたが当時の私にとってはどこか人ごとでした。しかし、その会議でまさにそのことが話題となり、彼らにとってはとても深刻な問題であることを知らされたのです。いろいろな問いかけに知らなかった恥ずかしさと、知らなかったでは済まされない日本人としての責任を痛感させられました。そんな中、親しくなったある少女が隣に座り、「あなたは自分をアジアの一員だと思っているの?」とさりげなく聞いてきたのです。私は返事をする事ができませんでした。当時の日本人は「脱亜入欧」の意識を強く抱いており、私自身も米国のテレビ番組を見て育ったせいもあり、外国というと西欧、特に米国しか意識していませんでした。この苦しみを実感している新しい友からのたった一言の問いかけは、日本のニュースの情報よりはるか



大阪大会実行委員会のみなさん

に強烈に私の心に突き刺さりました。得ていた知識によっては自分を変えようなどと思いませんでしたが、苦しむ友の一言は自分の生き方を変える問いかけになったのです。

それから毎年、ここで出会った仲間をつてをたどり現地の人々と交流するエクスポージャーを計画しました。社会の片隅に追いやられ貧しい生活を強いられる人たち、過酷な労働を強いられている人たちの中に入り、時にはホームステイもしました。実際に現地に立ち、湿気た温風を頬に感じ、強烈なゴミの臭いに顔をしかめながら、目の前に広がる光景を目の当たりにした時、そして、何よりもそこで生きる人々に直に接しその声を聞いた体験は、テレビなどでは決して感じるこのできない魂が揺さぶられるものでした。

ネットの情報は自分を決して傷つくことのない立場に置いて机上で集められる情報にすぎません。私達はそれをもって世界を分析する単なる傍観者、評論家になってしまう危険があります。自分を超えて外へ出向いて行き、当事者たちと関わり、ともに歩む時、はじめて魂を揺さぶられる体験をします。その時、目の前の人は「助けるべき人」ではなく、私にとって「大切な人」になり、「何かをすべき」ではなく、「何かをせずにはいられなく」なるのです。正義と平和協議会の活動の原点もそこにあります。「出向いて行って」「ともに歩む」(シノドス)の精神も同様でしょう。

正義と平和全国集会大阪大会を終えて

■ 松浦 謙 (大阪大会実行委員長 大阪教区司祭)

第41回 正義と平和全国集会大阪大会は2021年11月22日から23日にかけてオンライン形式で行われ、部分参加も含めると延べ約1200人がリモートで加わりました。テーマは「すべてのいのちを守ろう～誰も置き去りにしない世界に向けて No one will be left behind」でしたが、これは2019年の教皇訪日時のテーマにつなげたものです。サブテーマは国連のSDGs（持続可能な開発目標）のスローガンと同じ内容です。

今大会では青年や子どもたちも含めて出来るだけ多くの人に参加できるようにプログラムを企画しました。また単に知識を得るにとどまらず、聖書のことばに基づいて自らの生き方を考え、行動に活かすことを目指しました。そのために全体の講演会などは行わず、分科会のみとし小グループで分かち合いの時間を十分とることにしました。また各分科会では、基本的に、①See 学び理解する②Listen 聖書のことばを聴き祈る③Share 分かち合う④Act 行動につなげる、の4つのステップを踏むようにしました。またこれとは別枠で2日目の午前中にカトリック学校中高生の集い「正義と平和ユースフォーラム」および外国にルーツがある人・青年・子ども対象の「みんな地球人」という特別プログラムを計画しました。

当初は、指定会場に参加者が集まって行う集会を考えていましたが、大会半年前に大阪はコロナ感染の第4波に入っており、終息のきざしが見えませんでした。準備の時間を確保するために2021年5月の時点で、完全にリモート形式で実施することに決定しました。祈りの集いや分かち合い、懇親会、ミサも含めてすべてのプログラムをオンライン形式で

行わねばなりません。すでに一般社会では、テレワーク、リモート会議、学校ではオンライン授業などが、広く行われていますが、わたしたちにとってこのような全国大会の前例がないだけに果たして可能なか不安でした。

分科会の開設を募集した結果、皆さんは積極的に申し込んでくださり、その数は30に及びました。分かち合いをする際、進行役（ファシリテーター）の果たす役割が極めて重要ですので、そのための研修会を2回開きました。また、ITそのものに不慣れな人も多いので、パソコンやスマホなど機器の操作方法に習熟していただくためマニュアルを作成したり、Zoom操作の練習会も事前に行いました。皆さん熱心に学習してくださいました。当日は大会本部で対応チームがずっと待機する態勢を取りましたが幸い大きなトラブルもなく2日目のYouTube配信の派遣ミサをもって大会を締めくくることができました。

大会を振り返ってみるに、一つの所に集まり時間と場所を共有して過ごすことができなかったことは残念でしたが、日本全国各地から、さらにはフィリピンからの参加者もいたことはオンラインのおかげです。もちろん多くの課題は残されていますが、少なくとも、インターネットは、今後、宣教や司牧、教会活動を行っていく上での一つの手段として活用できると思います。

コロナ禍でありながらも、多くの皆さんの協力と祈りのおかげで無事に大会を終えることができ、心より感謝いたします。今後の「正義と平和」が実現する世界に向けての活動とその輪が一層広がっていくことを願っています。

第41回正義と平和全国集会2021大阪大会

「すべてのいのちを守ろう 誰も置き去りにしない世界に向けて」

日時 2021年11月22日(月) - 23日(火・休)

形式 オンライン

主催 カトリック大阪大司教区

共催 日本カトリック正義と平和協議会

分科会 30

特別プログラム 2

参加者 約1200名

プログラム

11月22日(月)

14:00 開会式とオリエンテーション

14:30 分科会 ステップ1 See テーマについての学習

17:00 分科会 ステップ2 Listen みことばと祈りの集い

18:00 オンライン懇親会

11月23日(火・休)

9:00 分科会 ステップ3 Share 分かち合う

分科会 ステップ4 Act 行動計画を立てる

14:00 ミサ

日本カトリック正義と平和協議会主催の分科会

分科会10 人権問題から見た福島第一原発事故 子ども脱被ばく裁判を通して

主催 平和のための脱核部会

発題 「子ども脱被ばく裁判と、その争点としての内部被ばく」 井戸謙一さん
「どうして私は原発事故問題に関わり続けるのか 宗教者という立場から考える」
片岡輝美さん

東京電力福島原発事故から10年が経ち、被災地の子どもたちに健康被害があらわれています。しかし政府、東京電力は、事故と健康被害との関係を認めないため、原発事故被害者を中心に「子ども脱被ばく裁判」が争われています。裁判の弁護団長、井戸謙一弁護士に、子どもたちが晒されている放射線被ばくの危険と、裁判の焦点「被災者の知る権利」について説明いただきました。また、裁判の原告のひとりである日本基督教団会員の片岡輝美さんより事故の経験を伺い、宗教者が「自分ごと」として原発問題に向き合うことの意味を共に考えました。

分科会27 私が牢にいたときに訪ねてくれた(マタイ25・36) 死刑囚のいのちも守ろう

主催 死刑廃止を求める部会

パネリスト 死刑囚と交流してきた方々

日本と世界の死刑制度および日本の死刑囚の置かれている現状についてのインプットの後、死刑囚と交流してきた3名の方々によるパネルディスカッションを行いました。死刑は処刑の残酷さだけでなく、収容・処遇に関しても非人間的な刑罰であること、ただそうした中でも人間的な交流や宗教的な恵みを感じる機会があったことなどが分かち合われました。

分科会28 平和をつなぐ

いま、キリスト者として憲法を考える

主催 ピース9の会、改憲対策部会

発題 「平和をつなぐ いま、キリスト者として憲法を考える」池住義憲さん(日本聖公会信徒、元立教大学大学院キリスト教学研究科特任教授)

トークセッション

Sr. 弘田しずえ、松浦悟郎司教

一日目は講師の池住義憲さんから、上記テーマで、憲法の基礎知識、戦争放棄の第9条への政府の憲法解釈の変化、昨今の改憲の動きについてお話を伺いました。二日目はSr.弘田しずえより、「非暴力の招き」と題して、キリストの生き方と憲法9条はまさに非暴力の生き方であるというインプット、松浦司教との対話の中で具体的に生きる方法を語り合いました。

分科会12「ゴジラから見た正義と平和」

大阪大会では、小教区が分科会を企画・主催するという試みもありました。

■ 幸前淑子（大阪教区和歌山紀北教会古屋聖堂 信徒）

和歌山紀北教会は分科会を主催し、和歌山信愛短期大学副学長の伊藤宏先生にお願いし「ゴジラから見た正義と平和」について講話をして頂きました。分科会のオンライン参加者は7名で、Zoomで参加できない方々のために古屋聖堂に会場を設け、18名の参加者がありました。

1日目はステップ①（See 理解する）で伊藤宏先生から東宝映画『ゴジラ』第一作（1954年11月公開）のお話があり、この映画を通して日本国憲法及び核、平和の話をして下さいました。伊藤先生から、この『ゴジラ』第一作目の映画は核実験反対のメッセージが込められていることを教えていただきました。映画の中の人物で芹沢博士という人の、「人間というのは弱いものだよ。一切の書類を焼いたとしても、俺の頭の中には残っている。俺が死なない限り、どんな事で再び使用する立場に追い込まれないと誰が断言できる。ああっ、こんなものさえ作らなければ…」という台詞が印象に残りました。

映画が製作された当時、南大平洋では頻繁に水爆実験が行なわれていました。1954年（映画『ゴジラ』が公開された年）3月には静岡県のマグロ漁船第五福竜丸がビキニ環礁におけるアメリカ水爆実験により被ばくし、この年の9月には第五福竜丸の久保山愛吉無線長が放射能症で命を落とされました。このことは、後に俳優宇野重吉さんの主演で映画化されています*1。

伊藤先生はこのゴジラ映画を通して、平和の大切さ、核は絶対持つてはならないこと、そして日本国憲法の重要さを私たちに話してくださいました。

ステップ②（Listen 聴く）では、会場参加者はお聖堂に場所を移してZoom参加者と共に聖書のみことば、詩編85章8節~14節を聴き、黙想をし、最後に聖歌「すべてのいのちを守るため」2番を唱和しました。



第12分科会 ステップ3 分かち合いの様子

2日目はステップ③（Share 分かち合う）で伊藤先生の講話を聞き、私たちは何を感じたかをZoom参加者と会場参加者に別れて意見交換しました。私は会場参加者のグループの進行係をさせて頂き、先生の講話を通して私たちはどのような行動をすれば良いかということ話し合い、10名の方々から色々な感想意見を聞く事ができました。「憲法、平和、核について考えさせられた」ということ、「一人の力は小さく弱いけれど共同体に積極的に参加して共に行動して行きたい」「困った人や苦しむ人々に積極的に寄り添う正義、武器を持たない平和について、教会共同体の中で確認しながら、地域とのつながりを深めながら、伝えて行きたい」「勇気を持って行動して行きたい」などなどの意見がありました。

コロナ禍にあって初めてのオンラインでの戸惑いもありましたが有意義な2日間を過ごすことが出来ました。学びの多い正義と平和大阪大会でした。

神様に感謝致します。

*1 映画『第五福竜丸』 1959年公開 新藤兼人監督

大阪大会参加者の声

大阪大会実行委員会があつめた終了後のアンケートからいくつかご紹介いたします。

●今回の星野ルネさんのように地方では有名だが、全国には知られていない素晴らしい人々を発掘し、特別セッションでどんどんやったら、みんな楽しく与れると思います。また、現場訪問などのプログラムもどんどん取り入れてほしい。死刑囚が収容されている拘置所への訪問もあっていい。死刑の残酷さを100万分の1でも感じるために。死刑囚と会えずとも、あの陰湿な空気に触れるだけで、死刑について考える材料にはなると思います。（「みんな地球人」参加者）

●もう40年前に高校生だった私が、厚かましくも若者の輪に入れていただいた背景は、40年前から未だ進展のない世界のあらゆる問題に対し、今の若者がどのように感じ行動しようとしているのかを、知りたかったからです。私たちの頃とは決定的に違う、あふれる情報の波と伝達スピードの速さの中、自分が選ばなければ、目を向けないでおられる社会の問題、関わらなくてもいいことには手を出さなければいい、と内向きになる傾向の強い今の若者が、どのように問題意識を持ち、実働していくのか、見たかったからです。

「ユースフォーラム」での発表では、あらゆる問題に気づき、積極的にかかわっていかうとする若者の素直な気持ちの芽生えを感じました。同時に、もっと知りたい、考えたい、でも方法がわからない、といった意見も見えてとれました。私たち大人は、こうした気づきのある子どもたちにヒントを与え、きっかけを示唆し、共に問題意識を共有できる者でありたいと思います。今回発表のあったカトリック校は、それぞれ母体が世界に広がる修道会の学校でした。カトリックミッションスクールの持つ、世界的なネットワークは、先進欧米に目を向けるばかりの風潮とは一味違う、アジアの兄弟姉妹との交流や友好、情報発信のできる環境にあるのではないかとも思います。こうしたメリットを生かし、本当の意味のグローバルな視野を身に着けてほしいものですね。ま

た、今回のような色々な学校の交流と意見交換が、これから是非続いていってくれるよう、願っています！40年前『大阪北地区高校練成会』そして『NOCY』の参加者として、あの若いころ、色々なことを考え、発言し、分かち合ったことが、大事な経験であったし、まだまだこの年になっても、実行できていない事、たくさんあります。若い皆さんの姿を拝見し、おばさんはそんな反省と、これからでも遅くない、社会問題に目を向ける態度を進めていきたいと思いました。

（「ユースフォーラム」参加者）

●戦うのでもなく、逃げるのでもなく、もう一つの道を探す努力をしていきたい。教会での平和活動は難しいところもあるが、これから生きていく世代の方たちに平和な世界をと願う心で小さい事でもいいから、一つずつ、行動したい。ピース9を大切にしていきたい。（分科会28参加者）

●30の分科会を立ち上げてくださったことに心から感謝しています。正義と平和、と聞くだけで、ああまた 憲法、戦争、原発、基地…の話かな、というイメージが今でもありますが、そんなイメージを一新してくれたような30の分科会。どれにしようかと迷ったくらいで本当にありがたかったです。次回もこのような豊かな分科会を立ち上げてください。

●最後のエンドロールはオンラインならではでしょうか、読みながら感動して泣いてしまいました。

●画面に映し出されると、知らない人も以前から知っていたかのように親しみを感じました。オンラインであったからこそ、現実では開催地域に参加出来ない方々も参加できた利点がある。

●「日本カトリック正義と平和協議会」の視点と視座は奈辺にあるのでしょうか。「日本カトリック

ク正義と平和協議会」として、このたびの「シノドスのあゆみ」にどう関与していくのでしょうか。カトリック信者はいずれかの小教区に帰属しながらも、口をつぐみ、理由はいかにあろうとも教会から置き去りにされてしまった信者（信徒）が存在していることも事実で、「共同体」は名ばかりになってしまい、その実体は揺れ動いています。神学の歪み、組織維持に信仰を持ちだしてしまった上意下達が悪弊が教団にはびこっていると考えられません。そこで思うのです。第二バチカン公会議から60年、一般信徒（聖職者信徒に対して）を主体とした、「主の正義と平和を心底願う信徒公会議」が開かれる「時」が来ているのではないかと。（分科会14参加者）

●講師は和歌山信愛短期大学・副学長の伊藤宏さん。分科会を選ぶにあたって、まず、講師の方が、和歌山信愛の副学長だということ。姉妹校である大阪信愛の卒業生である私は、学生時代から赤旗をふるような信愛にとっては異端児でしたけれど、失礼ながら信愛にも正義と平和協議会に関わられる方がいらっしゃるのだという興味。そして、ゴジラの映画を観たこともなくて、映画のテーマ、メッセージが何であるか「ゴジラから見た正義と平和」？どんな切り口で話されるのか？それも興味があって、この分科会に参加しました。これまでたくさんの全国集会に参加してきて、いつも似たり寄ったりのテーマ。今回、旧知の方が発題されるテーマも関心はあるけれど、ほぼほぼ何を語られるのか察しがつく。でも「ゴジラから見た正義と平和」って？参加申し込みをしてから、Amazonプライムビデオで「ゴジラ」「シンゴジラ」を観ました。「原水爆・原発、そういうことだったのか！」と、納得しましたし、伊藤さんのお話を伺って「そりゃ、正義と平和だわ」となこのこと腑に落ちました。（分科会12参加者）

●片岡輝美さん・・・宗教者としての関わり方に、カトリックの社会問題とのかかわり方に反省が必要だと思った。信仰に裏付けされた勇気ある活動に感動。素晴らしい生き方・行動だと感動する

が、カトリックの中で、「政治色を出すことにはいい顔をされない」ことは長年のことで、「やめておこう、どうせ反対されるだろう」と想像してしまうカトリックの在り方はシノダリティーを考える機会をいただいた今こそ、考えるべきであろう。素晴らしい生き方に感動し、信仰者として生き方を考えさせられた。（分科会10参加者）

●どうしても、自分の意見が正しいと思い込んでしまいがちなので、人間同士として対話すること、これからも日々努めていきたいと思えます。

●みなさんのご経験の深さに尊敬しつつそれぞれのお話に聞き入りました。いままでの対面の分かち合いですと、ご経験の多さから又はお優しさから責められたり、指導されたりと、発言した事に深く反省し何も言わなければ良かったと参加したことを後悔する事が多く、今回も分かち合いがあるなら参加したくはありませんでした。今回は注意事項が行き届かれて、意見される事が無かったのでとてもありがたかったです。

●最初に担当司祭から、「意見を述べるときは、批判はしないように…」みたいなことを言いましたが、個人を批判するのではなく、その意見（考え・言動）に疑問や違和感を述べることは必要だと思います。むしろ、その意見（考え・言動）に疑問や違和感を述べられたために、感情的に怒ったり、落ち込んだりしないような、そんな分かち合いでないと、表面的な嘘っぽいもので終わると思います。教会の場合は、特にいつもそうです。

●正直なところ、この時間（ステップ3 わちあい）が一番「勇気」が必要でした。しかし幣原喜重郎氏が発案しマッカーサーに提案した勇気を思うと、私も何か出来る事をしなくてはという気持ちになりました。後期高齢者の域に突入しましたが、教会を祈りで支えるのは高齢者の役目と自覚し更に一歩前進したいです！

（分科会1参加者）

23日（火・休）に行われた二つの特別プログラム

●外国にルーツのある人・青年・子どもプログラム「みんな地球人」

特別講師として漫画家でタレントの星野ルネさんをお迎えした本プログラム。星野さんご自身が経験した『自分と人の見え方の「違い』』について、漫画を使って子どもたちに分かりやすく示して下さり、同じ“地球人”として「人を人として見て接する大切さ」を考えるきっかけをくださいました。今回は初めてのオンライン開催となったことも1つの挑戦でしたが、終始笑顔の絶えない3時間でした。

以下に、企画したスタッフの感想を掲載します。

コロナ禍での初オンライン開催となった今大会でしたが、私たちのプログラムで特に感じたのは、子どもを持つ親がとても参加しやすかった事です。子どもと一緒に参加するのは、保護者にとって様々なハードルがあります。例えば、子どもを連れて会場まで出かけていく事も大変ですし、講演中に子どもが泣き出したりして講演の邪魔にならないかなど会場での心配もあります。その点でオンラインは自宅からの参加が可能となり、音声をミュートにすれば音の問題もありません。途中で席を外す事も気を遣わずにできます。今後、講演会などを企画する場合は、オンライン参加も可能なハイブリッドにすれば、子育て世代の人たちも参加しやすく関りを持てる機会が増えると思います。

橋本直人（神戸中央教会）

ZOOM会議中心に準備をし、本番もZOOMで行うという慣れていない状況の中、プログラムの最後に「オンラインでも伝えられた！」と実感できたことをとても嬉しく思います。開始前はコミュニケーションが取りづらいと思い込んでいました。しかし、話している人だけでなく、聞いている人の表情も知ることができたり、画面の中からそれぞれのご家庭の様子が垣間見えたりし、オンラインという環境だからこそ知り

得る情報があり、新たに分かち合えるものが生まれると感じました。荒川奈々恵（枚方教会）

星野ルネさんの講義では、生活習慣、見た目、価値観、ルネさんだからこそ感じられた様々な視点からのお話を聞くことができとても興味深かったです。特に、国や文化が違ったとしても互いの存在を尊重し合うべきであること、また持って生まれたものを素晴らしいと気づくことについて学ぶことができ、とても良かったです。なぜなら、コロナ禍で家にいることが増えた今、差別などが他人事のようになっていたからです。ありがとうございました。高橋美仁（箕面教会）

人種や民族で人は分けられるが、分ける基準を変えると「みんな地球人」です。世の中には色々な考え方があって、多様性を理解して受け入れることで生きづらい世の中であっても優しく生きて行けるのではないかということが話されました。子どもたちが小さな世界ではなくもっと広い世界で羽ばたけるよう翼を授けてほしい。世界の広さ、価値観の広さ、選べる生き方の広さを、もっと大人たちに教えてほしい。学校以外の居場所があることは子どもたちにとって救いとなるので、教会にその一端を担ってほしいということを提案されていると感じました。

坂本規子（姫路教会）

●中高生プログラム「正義と平和 ユースフォーラム」(カトリック学校教員有志主催)

今回、日本カトリック正義と平和全国集会初の試みとして、「ユースフォーラム」を開催し、これからの世界を担う高校生たちの様々なソーシャルイシューについて、意見交換をしました。以下、発表の振り返りです。生徒が書いたもの、教員が書いたものが混在しておりますが、これからのアクションにつながるフォーラムになりました。

【神戸海星女子学院中学校・高等学校】私たちは、「世界希少・難病性疾患（RD）について」発表しました。ブレイクアウトルームでは、RDについて「広く知ってもらうことの大切さ」について話し合いました。これからも高校生のActionによってたくさんの方々に知ってもらい、世の中が当事者の方が生きやすくなる社会が少しでも広がるきっかけになるよう活動を続けていきたいと思いました。

【城星学園中学校・高等学校】私たち人権委員会は「コロナ禍で見えてきたもの」というテーマで、コロナ禍によって可視化された問題（教育格差、情報格差、市井の差別意識など）について調査し、発表しました。これまで人権委員会の活動は校内に留まっていましたが、今回の全国集会でオンライン上ではありましたが、他校の生徒の発表を聴いたり、意見交換をすることを通じて他校と交流を持てたことは貴重な体験となりました。

【アサンプション国際高等学校】今回進行も務めさせて頂きました。人生初の司会役は非常に緊張しましたが、皆様のご協力のおかげで無事に終えることができました。ありがとうございました。コロナ禍でなかなか交流ができない中、社会問題に興味を持ちそれぞれの方法で解決に向けて努力を続ける高校生と出会い刺激を受けたことは、きっと皆さんの糧になると思います。SDGsの達成のために、将来の日本を担う私たちがアクションを起こし続けていきましょう！

【六甲学院】本校は高校1年生のカトリック研究会のメンバーが発表の準備にあたった。テーマを決定する過程で出た案は「性教育の遅れ」「宗教文化間の違い」「外国人労働者」「マイクロプラスチック問題」など多岐にわたるものであった。その中で彼らにとって印象的だった出来事が「カブール陥落」であった。なぜこのようなことが起きるのか。彼らにとってその漠然

とした疑問は、問題の本質を知りたいという欲求に変化していき、「宗教文化間の違い」に決定した。いざ、発表の準備をしていくと、アフガニスタンだけの問題ではなく、ウイグル自治区など、イスラーム全般に関する知識不足に気付かされた。そこと日本との関連は何かないか。そうした中で発表を迎えた。当日の分科会では進行に戸惑ってしまったが、教員の補助もあり「異文化の人を自分の内に迎え入れられるか」という問いを深めていくことができた。今後ますます多様化していく現代において、生徒たちが善きサマリア人のように異文化の人を受け入れられることを願う。

【函館ラ・サール高等学校】オンラインでの発表会を今までも行ってきたが、他校の学生の方と自分たちの活動について振り返り、考えることは初めての体験であった。一方的に発表を行い大人の方々からの講評をいただくのではなく同年代の方々と議論を交わすことができ、とても参考になった。私たちがこれからどのように学んでいくべきか、現在の教育の問題点は何かなど新しい視点から考察することもでき、有意義な時間を過ごすことができた。

【小林聖心女子学院高等学校】私は世界の深刻な教育問題に焦点を当てたプレゼンを行いました。これまで貧困層の子どもたちのことを知り考える機会が多くあり、その子どもたちが直面する教育問題の解決に携わりたいという思いがあったため、教育問題をテーマに選びました。教育問題だけではない様々な社会問題についての発表とディスカッションにより、自分の社会に対する責任感を思い知らされたと同時に、自分が社会に与えられる影響力の大きさに気づかされました。今回の発表体験を踏まえ、現在学校では他校の生徒さんが共有して下さった取り組みを、校内の団体の一つの企画として始めています。今後も様々なアングルから持続可能な社会づくりに貢献していきたいです。

山口島根地区 “イエスの好み” としての識別

■ 中井 淳 (イエズス会下関労働教育センター)

今年度の山口島根地区社会教説行脚では、イエズス会がこの時代において大切にすべきミッションとして教皇フランシスコと共に選んだ四つのミッションについて紹介しています。その四つとは、1. 霊操（イグナチオが残した黙想の仕方）及び識別を通して人々を神へと導くこと、2. 排除された人々、周辺に置かれた人々とともに和解と正義のミッションにおいて歩むこと、3. この社会の歪みを負っている若者たちと共に歩むこと、4. 共に暮らす家である地球を大切にすること、です。この時代にイエスが生きていたら、この四つのミッションを好んで生きていただろう、ということで、「イエスの四つの好み」と私たちは呼んでいます。この四つを祈りのうちに置いて生活していると、聖霊の風が吹き、出会いと繋がりが生まれ、少しずつこれらのミッションが生活の中に統合されていくのを感じてきました。その体験を信徒の方たちの助けになるように話していますが、ここでは識別に焦点を当ててみます。

平和を作っていく活動に識別が必要であるということを誰よりも強調しているのが教皇フランシスコです。『コロナの世界を生きる』という本の中でかなりのページを割いてフランシスコは識別の大切さについて語っています（第二部・選ぶとき）。ここでフランシスコが識別というとき、それは彼が所属しているイエズス会の創立者のイグナチオが体系化した識別のことです。識別とは、良い霊の動きと悪い霊の動きを見定めることです。イグナチオはそれを慰めと荒みという言葉で表しましたが、オーストラリアのパトリック・オサリバン神父はある本の中で、drawn（引き寄せられる）、driven（駆り立てられる、急き立てられる）という言葉で表現しており、それが私にはしっくり来ます。引き寄せられる感覚とは、内側から勇気が湧いてきて、心には平安があり、行動が自分自身の

一部になっている感覚、生活に統合されている感覚があります。外側から強制されたもの「せねばならない」ではなく、心の奥深くにある望み「したい」に根を置くものです。この時、私たちは目の前にある問題を解決しようとして自力に頼るのではなく、委ねることへの招きを感じます。逆に、駆り立てられる感覚とは、外側からの過度の期待の重圧、重い義務感、している行動が自分の人生の一部とはなっていない感覚です。自分の価値を認められなくなり、出口のない穴の中をぐるぐるさまよっているような感覚です。駆り立てられる感覚の源には、恐れや不安があります。

私が日本のナショナリズムの問題にぶつかっているとき、韓国の神父さんが、「私たちは個人の識別も大事だけれど、社会が何によって動かされているのか、愛によってなのか、恐れによってなのか社会的識別をしていかなければならない」と言ってくれたことは、私をととても鼓舞してくれました。

私たちの社会を見てみると、駆り立てる霊によって動かされているものがいかに多いかに気づかされます。偏狭なナショナリズムは、異なる他者への恐れと不安によって大きくなっていきます。自衛隊を軍隊に変えようとしたり、陸上・海上のミサイル基地を作ろうという動きは、政府やメディアが人々の恐れや不安を掻き立てることで後押しされます。原発やさまざまな問題の奥にはこの駆り立てる霊が働いていることがわかります。フランシスコが強調する「識別」の中に社会的霊性の宝がたくさん秘められています。行く先々の小教区で短い時間ですが、識別のための振り返りの祈りを信徒の方々に一緒にしてもらいます。識別という宝をたくさんの人々に共有してもらえば、平和を作る教会へと成長していくと確信しています。



牧水と自然～喜び、行動する～

■ 大口玲子 (歌人)

若山牧水(1885～1928)は「旅と酒の歌人」として知られる。〈幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく〉〈白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり〉など広く愛唱されている短歌は、まさに孤独な旅と独酌を詠んだもの。「旅」と「酒」にもう一つ加えたとしたら、「恋」という人もいるだろうが、私は「自然」を挙げたい。特に、〈白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まらずただよぶ〉のような初期の観念的な作品よりも、具体的な場所や動植物などの自然と親しく素直に向き合う後期の作品に心ひかれるものが多い。

・雀啼くなんといふそのたのしげのほしいままなる啼声かいま 『さびしき樹木』

・手を洗ふにほどよきほどのほそき滝きよらにかかる道の傍に 『くろ土』

・手にとらばわが手にをりて啼きもせむそこの小鳥を手にも取らうよ

雀のさえずりという身近でありふれた自然に出す至福。手を伸ばし今にも触れたいくなるような滝や小鳥。ただ見つめて描写する対象としての自然ではなく、まして征服すべき相手でもなく、牧水が愛でるのはひたすらよきものとして一首の中で輝き、ともに喜んで生きている自然である。この牧水の自然との向き合い方は近代短歌の中でユニークなものであるが、むしろ現代の私たちにはよくわかる感覚なのではないだろうか。

・うち仰ぎ眺めつつわれのあるからに老松が梢はゆれてやまなく 『黒松』

・われはもよ幼子のごとあふぐなりこの老松の根にし立ちつつ

・日に三度来り来飽かぬ松原の松のすがたの静かなるかも

牧水がときに幼子のようになって見上げ、一日に何度も訪れてその姿を眺めたこの「老松」は、静岡県沼津の千本松原に生える老木である。駿

河湾に沿って十キロ続く千本松原には、16世紀に増誉上人が住民のために植えたという黒松の古木が繁っている。牧水はこの千本松原に強くひかれ、一日に何度もたずねては飽きることなく散歩を楽しみ、歌にもたびたび詠んでいる。ついには隣接する土地に家建てたが、なんと翌年の夏に静岡県が財源を作るために千本松原伐採計画を進めていることが明らかになる。数日間そこへ行けなくなるほどのショックを受けた牧水は反対運動の先頭に立ち、地元の新聞に「沼津千本松原」(1926)という文章を寄稿する。「静岡県にも、県庁にも、また沼津市にも、具眼の士のあることを信ずる。而して眼前の些事に囚はれず徐に百年の計を建てて欲しいことを請ひ祈るものである」と結ばれたこの文章は、千本松原の美しさと尊さ、その歴史と意義を詳細に述べ、それらを犠牲にする愚かさを丁寧に説く美しい檄文である。同じ文章の中では「松原の特色として挙げたいのは、単に松ばかりが砂の上に並んでいる所謂白砂青松式でないことである。(中略) 此処には聳え立つた松の小草に見ごとな雑木林が繁茂してゐるのである」と述べ、たぶや犬ゆずり葉など数多くの植物の名前を挙げ、さらにその根かたに密生する羊歯、茂みに集まる鳥についてもその種類を細かく書いている。今でこそ「生物多様性」や「生命の循環」という言葉で表現されている観点を牧水が体験的に身につけていたこと、そのかけがえのなさを理屈ではなく直観的に見抜いていたことはもちろん、千本松原を守るために新聞に寄稿し、本来は得意ではない人前での演説、選挙の応援まで牧水がしていたことに感銘を受け、励まされる。

反対運動の盛り上がりによって伐採計画は立ち消えになった。喜びのうちに自然との関係を結んだ牧水は、自然環境の危機には人間が意識して声を上げ、行動し、時に政治参加も必要となる時代の始まりを、身をもって体験したのである。

目次

- 特集 第41回正義と平和全国集会2021大阪大会
(2021年11月22日～23日)
- 1 巻頭言 正義と平和全国集会大阪大会が終わって …… 勝谷 太治
 - 3 正義と平和全国集会大阪大会を終えて …… 松浦 謙
 - 4 第41回正義と平和全国集会2021大阪大会概要
日本カトリック正義と平和協議会主催の分科会
 - 5 分科会12「ゴジラから見た正義と平和」 …… 幸前 淑子
 - 6 大阪大会参加者の声
 - 8 23日(火・休)に行われた二つの特別プログラム
 - 10 (連載第5回)カトリック社会教説 一步一步
山口島根地区 “イエスの好み”としての識別 …… 中井 淳
 - 11 (連載第15回)シロツメクサの花かんむり
牧水と自然～喜び、行動する～ …… 大口 玲子
 - 12 まんが 連載第4回「神学生トマス」

表紙写真 大阪大会特別プログラム「みんな地球人」会場（大阪教区神戸中央教会）にて 写真中央：星野ルネさん



各地からの報告

正義と平和 えとせとら…

事務局

事務局から

2010年12月末、まさにあの3.11東日本大震災による東京電力福島第一原発事故が起こる、わずか3ヶ月足らず前、日本カトリック正義と平和協議会はリーフレット『原子力発電は“温暖化”防止の切り札ではない！』を発行しました。発行当時はまさかあのような大事故が間もなく起こるとは、想像もしていませんでした。事故後、原発の危険を的確に訴えるこのリーフレットの注文が、教会内外から殺到し、総計で11万8000部を配布、その後長く品切れの状態となりました。しかし今でもリーフレットが欲しいというお問合せが絶えることはありません。

あれから11年、気候変動問題がいよいよ深刻化するなか、原発再稼働の声が徐々に大きくなり、このリーフレットが掲げた当初の問題意識「原発は温暖化防止の切り札ではない」という訴えを、今こそしなければならぬ事態となっています。そこでこのたび、最新の情報を入れて内容を一部改訂し、改訂版を発行することにいたしました。地球温暖化を防止できるのなら、原発を稼働開発してもいいのか。そもそも原発は地球温暖化を食い止めることができるのか。気候変動を口実に原発を再稼働しようとする動きについて、ここで立ち止まって、ともに考えてみましょう。



編集後記

1月の沖縄県名護市の市長選挙で、辺野古新基地建設に反対する候補者が落選した。この結果から、沖縄の人たちは実は新基地に反対していないのではないかと短絡的に考えてはいけない。新基地建設に反対しなかった当選者は、与党側のメリットを活かしてたくさんの公金を市政に使うと約束し、人々は、基地反対の声をお金の力で封殺されたと悔やんでいる。「正義と平和」とは何でしょう。「正義と平和」は詩篇85の由緒正しい言葉だ。しかしこの世界には「正義」も「平和」も実現してはいない。「平和げけ」とは「平和すぎて思考力が衰えた」というのが原義だろうが、「身の回りのことしか見えなくて平和についての想像力がはたらかない」というのが本当のところだろう。「正義と平和協議会」が「正義」なのではありません。死んで打ち捨てられた小さな骨の破片から、「正義」の実現のために何をすればいいのかを考え、真実の「平和」を願う。それが「正義と平和」協議会です。(h)



発行日 2022年2月1日(隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円(送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>